

霞

— 2021年度冬季展示室だより —

土浦市立博物館
令和4年1月5日発行(通巻第56号)

当館では「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(56) 絵葉書「桜川堤観桜会」



目次

○古写真・絵葉書にみる土浦(56)	1
○博物館からのお知らせ	1
○跡取りを探せ(近世)	2
○関知信が見たロシア船(近世)	3
○土浦地方の綿栽培と綿切りロクロ(近世・近代)	4
○「新治県」の刻印のある火縄銃(近代) .	5
○市史編さんだより	6
○土浦藩土屋家の横顔	7
○霞短信「土浦一高生の博物館見学感想レポート」	8
○コラム(56)	8
○情報ライブラリー更新状況	8

大正10(1921)年頃の、おおまちどう そしんじや大町道祖神社前での花見風景です。紅白幕が張られ、中折れ帽子やハンチングキャップの粋な姿で、うたげ宴がひらかれています。桜川堤防の桜の由来は、明治43(1910)年、道祖神社へ参拝をした邊田桑蔵へたくめぞうが、その効験によって妻の足の病が治ったことに感謝して桜を寄進したことに始まります。大町の人々は、この桜を日露戦争の戦勝記念に道祖神社をはさんだ堤防上に植えました。【情報ライブラリー検索キーワード「風俗」】

博物館からのお知らせ

★★博物館のひな人形★★ 1月5日(水)~3月13日(日)

博物館所蔵の江戸時代後期から大正時代のひな人形を飾ります。

★★昔のくらしの道具★★ 1月5日(水)~3月6日(日)

小学校3年生の校外学習にあわせ、40~100年位前の道具を展示します。

★★はたおり作品展★★ 2月26日(土)~3月6日(日)

はたごしらえ講座受講生と、はたおり伝承グループ「綿の実」による作品展です。

はたおり体験(土・日は事前予約が必要)もできます。

★★第43回特別展「八田知家と名門常陸小田氏

—鎌倉殿御家人に始まる武家の歴史—★★

3月19日(土)~5月8日(日)

鎌倉時代の御家人はったともいえ八田知家は常陸国守護を務め、子孫は筑波山麓の小田を拠点に勢力を広げます。この展覧会では、知家にはじまる常陸小田氏の歩みを紹介します。

特別展に関連してシンポジウムの開催を企画しています。

博物館ホームページをご確認ください。

※新型コロナウイルス感染症の予防・対策にご協力ください。

★休館日のお知らせ★

- ・毎週月曜日(1月10日、3月21日を除く)
- ・1月11日(火)
- ・2月15日(火)
- ・2月24日(木)
- ・3月14日(月)~18日(金)
※3月15日~18日の間、東櫓は開館しています。
- ・3月22日(火)



博物館マスコット
亀城かめくん

跡取りを探せ

ひろなお

—土屋寛直の養子をめぐる書状—

「霞」第53号の「土浦藩土屋家の横顔」では、8代当主土屋寛直の経歴を紹介しました。寛直は跡取りがないまま早世し、土浦藩土屋家はお家断絶の危機に陥ったことから、家臣は土屋家の跡取り探しに奔走します。今回は、その一端が垣間見える書状を紹介します。

書状は土浦藩執次役の大月七右衛門ほか3名が連名で千賀氏へ宛てたものです。年号はなく「正月」と書かれています。国文学研究資料館が所蔵する「土屋御系図」によれば、寛直の養子が決まるのは文化8（1811）年1月18日ですので、この書状も文化8年1月に書かれたと考えられます。

書状は次の言葉で始まります。

左門様御養子之儀、追々御内談御座候処無御抛御差支等御座候二付、先達而御内々御沙汰も御座候（左門様養子の件は少しずつ話をしてきたものの、どうにもならない事情で差し支えてしまった。先日は内々のご沙汰もあった。）

土浦藩の家臣は寛直（左門）の養子探しをしていましたが、支障があり難航したようです。この支障について、書状に詳細は記されていませんが、恐らく寛直の病没を指していると考えられます。『土浦市史』によれば、寛直は病弱で、文化7年10月15日に16歳で亡くなっています。これを裏付けるように、寛直が15歳の甲青着初めで着用した具足は、年齢の割に小柄な造りをしています。病弱で実子のいない当主であったからこそ、家臣たちは養子探しに奔走していたと考えられます。その最中に寛直が亡くなったため、土屋家は養子を迎えることに差し支えてしまったのでしょう。

書状に書かれた「御沙汰」とは幕府からの命令を意味します。この「御沙汰」は、徳川治紀（水戸宰相）の弟治三郎を土屋家の養子にするというものでした。書状には、土浦藩では水戸宰相の弟を養子とすることに在所（土浦）や江戸表の藩士も意見が一致しているため、土屋寛直の妹を養女にして治三郎を養子とすることについて、どうか話を進めていただきたい、と記されています。



土屋左門（寛直）の養子に関する書状（個人所蔵）

文化8年4月19日、治三郎は幕府から土屋家への養子入りを正式に認められ、後に名を彦直と改めます。彦直の養子入りに際しては、寛直急死のほかにも、土浦・水戸各藩の内部で賛否両論がありました。様々な支障を乗り越えた上で土屋家が存続したことを、この書状は物語っています。

（西口正隆）



冬季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近世コーナーに展示しています。

- 黒漆塗両引合二枚胴童具足 土屋寛直所用（当館所蔵）
- 彦直公御入部御行列 文化11年8月（個人所蔵）



ともものぶ
関知信が見たロシア船
 め じ る し や ま
— 目印山陣中日記 —

土浦藩主土屋寅直（1820～95）は、嘉永3（1850）年9月、大坂城代に任命されました。関流砲術を継承する関内蔵助家の当主、知信（1801～72）は、大坂への先発を命じられ、10月3日に江戸を発ち、16日に大坂に到着しています。嘉永4年2月、寅直は970名余の藩士を率いて大坂に入りました。

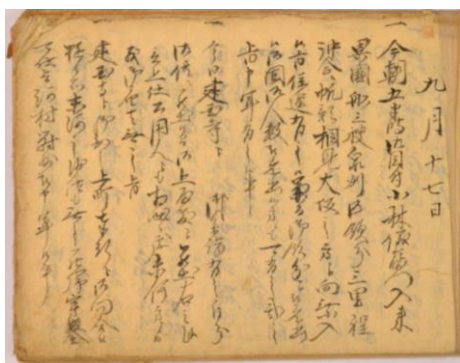
嘉永6年6月、アメリカ艦隊を率いてペリーが来航すると、日本中が大騒ぎとなりましたが、その翌年、ロシア皇帝ニコライ1世の親書を携えてきたのが、海軍中将プチャーチンです。フリゲート艦ディアナ号が天保山沖（大阪湾）に停泊し、大坂町奉行への面会を求めたのは嘉永7年9月18日のことで、京都・大坂は騒然となりました。

天保山（大阪市港区）は、天保年間に安治川を浚渫した土砂を盛り上げた築山で、入港する船舶の目標として灯台を設置したため、目印山とも呼ばれていました。大坂城代土屋寅直、大坂定番米倉昌寿・田沼意尊らが、総勢1万4千～5千人の陣を構えました。京都の御所や主要寺院には近隣の譜代藩が配備されました。

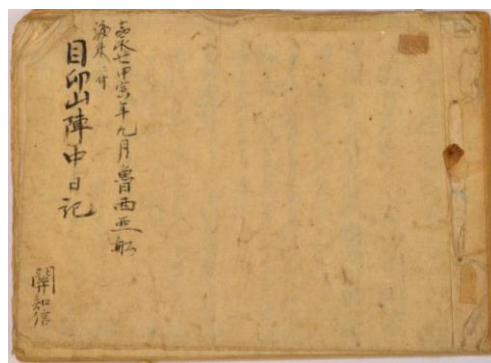
寅直は、江戸の老中阿部正弘らと緊密に連絡を取り、大坂が交渉の場ではないことを説得し、10月3日、プチャーチンは伊豆下田（静岡県下田市）に向けて出航していきました。

「目印山陣中日記」はディアナ号停泊中の知信の日記です。9月17日にロシア船の帆影が見えると、その日のうちに警備要員を整えたこと、18日には関流の門弟たちが、早合（葉莖）の袋詰めや大筒の導火（口火）作製、火薬の調合を行い、「午後10時頃までかかり、骨が折れた」ことなど、詳細な記録です。土浦藩の大坂屋敷に呼び出され、寅直から「万一戦闘になっても動揺せず、砲術の技を活かせ。負け戦になったら命懸けで防御せよ」と命を受け、「ご安心めされ」と返答したものの、寅直の奥方と若殿に「無事に帰るように」と言葉をかけられ「涙がこぼれた」と書いていますから、感情も高ぶっていたようです。19日午前10時頃、ロシア船からバツテイラ（ボート）がおろされ、岸に近づいてきました。「手早く筒に玉が込められ、火縄に火をつける者もいた。大筒を打つ準備も整ったが、みだりに発砲してはならぬと、走ってこれを制した」と、臨場感にあふれる内容になっています。

（木塚久仁子）



冒頭



表紙

「目印山陣中日記」嘉永7年9月17日～10月10日（個人所蔵 土浦市指定文化財）



冬季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近世コーナーに展示しています。

- 関知信肖像（個人所蔵 土浦市指定文化財）
- 谷神注文書（個人所蔵 土浦市指定文化財）



わた 土浦地方の綿栽培と綿切りロクロ

かつて、土浦地方の農家では、自家用の衣料をまかなうための綿栽培が行われていました。収穫した綿を使って女性たちが木綿を織り、家族の着物を仕立てていたのです。昭和30年頃まで行われていた木綿織りの技術を継承するため、博物館では平成2（1990）年から「はたおり教室」を開講してまいりました。現在は「はたごしらえ講座」と名称を変えて、伝承活動を継続中です。

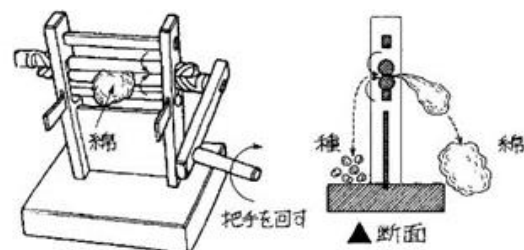
土浦周辺で綿栽培が行われるようになったのは、16世紀末頃と推測されますが、市内ではその頃の記録をまだ確認できておりません。そのかわり、江戸時代後期の古文書に綿栽培の記録をいくつかみつけることができました。

たとえば、白鳥村（市内白鳥町）の名主を務めた富岡家に伝わった日記があります。文化11（1814）年は4月4～5日（現在の暦に直すと5月23～24日）に種を蒔き、8月27日（同10月10日）に収穫した綿の実を干すための綿干し場を拵えています。そして、11月24日（同1815年1月4日）の夜から「綿くり」を始めました。綿繰りとは、干した綿の実から種と繊維（綿毛）とを分ける作業のことで、「綿切り」とも呼ばれるものです。

土浦城下の国学者色川三中の日記にも、綿に関する記述がみられます。文政9（1826）年は天候に恵まれ「田畑とも宜しく、綿殊のほかよろし」と豊作でしたが、冷夏であった天保4（1833）年は7月1日（同8月15日）になっても高さ5寸（約15cm）ほどにしか成長しませんでした。また、天保7年も不作の年で、このときには土浦藩が大坂で種を買い上げて、希望者への払い下げをしています。色川家でも2升分の種を土浦藩から買っており、綿が大切な作物であったことをうかがわせます。

さて、博物館では「はたおり教室」や「はたごしらえ講座」の卒業生たちの協力を得て、小学生への「はたおり体験」を行っています。子供たちに人気なのが「綿切りロクロ」による綿の種取りです。綿切りロクロの長い板の部分に座って、右手でハンドル部分を回して上下のローラー部分を回転させ、そこに左手で綿の実を挿入していきます。回転するローラーに綿の実が引き込まれていき、挟まれた綿毛は先に送られ、通過できなかった種が手前に落ちて残ります。こうして分離された綿毛が糸の材料となり、種は来年また畑に蒔かれることとなります。綿切りの作業は、昔の子供たちの手伝いのひとつだったそうです。今の子供たちは楽しそうに夢中で綿切りをしてくれますが、これが日々の仕事だったかもしれない昔の子供たちは、どのような気持ちで綿切りをしていたのでしょうか。

（萩谷良太）



ロクロの仕組み
（『新横須賀市史』別編民俗より）



綿切りロクロの使用状況



冬季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
近世・近代コーナーに展示しています。

- 「家事志」（色川三中日記、当館所蔵 茨城県指定文化財）
- 「土浦地方のはたおり道具」（当館所蔵）



「新治県」の刻印のある火縄銃

茨城県は、明治4（1871）年に行われた府県統廃合により初めて誕生してから、令和3年の「県民の日」（11月13日）で150年の節目を迎えています。土浦市域は現在、茨城県に属していますが、明治4年7月には「土浦県」、11月には「新治県」の管轄となり、いずれも県庁は土浦城址におかれていました。明治8年に新治県は茨城県に統合され、ほぼ現在の県域が確定されました。

わずか数カ月の「土浦県」、数年間の「新治県」ではありますが、明治初年の県からの布告や回状^{かいじょう}、県宛ての届出や願書などにその名が散見され、存在を示しています。

写真の火縄銃には、いずれも木製の台尻^{だいじり}に「新治県」の刻印があります。①は行方郡於下村^{なめがた おした}（行方市於下）に残されていたものです。於下村は新治県の管轄でした。銃身（金属部分）は、戦時中に金属回収のため供出され、残っていません。②は錆びてはいるものの銃身が残る火縄銃です。残念ながら伝来は明らかではありません。これらの「新治県」の刻印はどのような意味を持つのでしょうか。

明治新政府は明治5年、本格的な銃砲取り締まりを開始しました。同年1月29日に制定され、4月から施行された「銃砲取締規則」は7則から成り、その第5則が猟銃の免許と軍用銃の刻印登録制度でした。これにより、身分を問わず、免許銃以外に軍用の銃砲・弾薬類を私的に所持することが禁じられ、銃砲を所持する際には官庁への届出が必要とされました。刻印を付し官に登録する、許可登録制度がはじまったもので、「新治県」の刻印は官に登録された、所持が許可された銃であることの証でした。

古文書をひもとくと、白鳥村（市内白鳥町）富岡家文書には、明治5年3月に新治県庁から出された鉄砲取締布告の写しが残っています。布告を受け、組頭ほか28名の住民が鉄砲や弾薬を一切所持していないとする書上が4月に作成されました。また、土浦藩で砲術指南をつとめた関家には、明治5年から9年当時所持していた鉄砲の登録に関わる記録が残っています。明治9年には「新治県 壬申六一」^{じんしん}から「壬申八五」の25挺と「新治県 南蛮流」^{なんばんりゅう}（4挺）が届出のうえ登録され、明治新政府の管理下におかれたようです。

「新治県」の刻印が残る火縄銃は、新政府の規制下に銃砲類もおかれたことを示すとともに、政情不安であった明治初期という時代を象徴する資料ともいえそうです。（野田礼子）



①火縄銃（銃身なし）（当館所蔵）

②火縄銃（銃身あり）（個人所蔵）



①拡大



②拡大

参考文献：保谷徹「免許銃・所持銃・拝借銃ノート—明治初年の鉄砲改めと国産「ライフル」—」（『近代日本の形成と地域社会 多摩の政治と文化』2006年）



冬季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近代コーナーに展示しています。

●常陸国新治県庁郭土浦町総図 明治6年 当館所蔵

●櫓門前での記念写真 明治17年以前 当館所蔵



市史編さんだより

土浦藩士に届いたアヘン戦争の記録—「長島来翰集」より—

長島尉信は小田村西町小泉家に生まれ、小田村田向の名主長島家の養子となり、名主を務めました。天保9（1838）年に著作『田芹』を水戸藩主徳川斉昭に献上したことがきっかけとなり農政学者として水戸藩に仕官し、天保14年には土浦藩に召し抱えられて慶応3（1867）年に亡くなるまで土浦藩士として検地や城普請に尽力しました。

「長島来翰集」には尉信によって保管されていた600通以上の書状が収録されています。多くの著作や書写した蔵書を所持した尉信のもとには、水戸藩・土浦藩の藩士や儒者などから様々な情報がもたらされ、またその情報への意見を求められました。

今回紹介するのは、藤森弘庵に師事し江戸の昌平黌でも学び、のちに土浦藩の世子の侍講も務めた学者五十嵐愛山（儀一）からの書状です。この書状には干支など年代のわかる情報の記載はありませんが、収録されている来翰集18巻は弘化4（1847）年の書状が多いので、その頃に尉信が受け取ったものと考えられます。

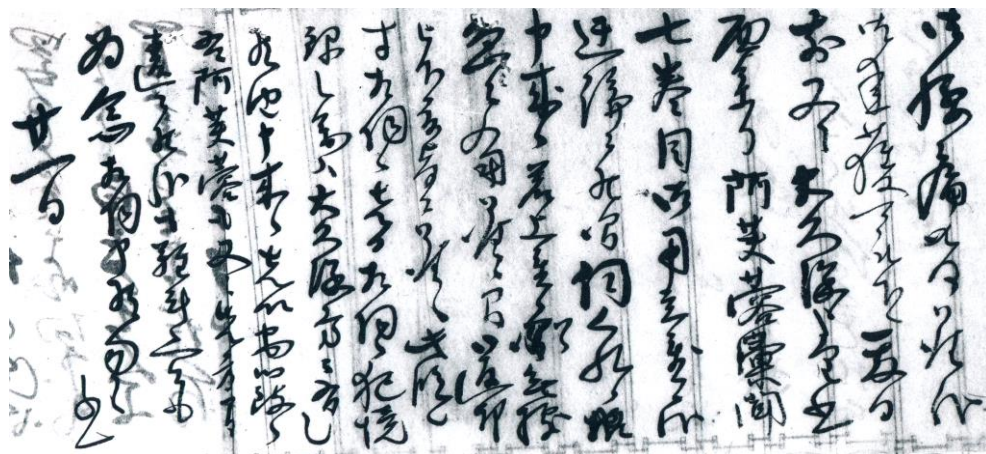
内容をまとめると、次の4点になります。

- ①尉信の腰痛を心配し養生を願う。
- ②一兩日前に大久保（要）から書状が来て『阿芙蓉彙聞』7巻を用立てて欲しいとの依頼があったため返却して欲しい。
- ③先日尋ねた『犯境録』は大久保の所にあつたので安心した。
- ④今回問い合わせがあった『阿芙蓉彙聞』7巻を探している件も大久保の勘違いかもしれないが、念のため問い合わせた。

『阿芙蓉彙聞』『犯境録』は、アヘン戦争について書かれたもので、『阿芙蓉彙聞』では著者塩谷岩陰が海防の必要性を説いています。当時海防に関心が高かった大久保要がこの2冊を探していたのは興味深いことです。

ここで特に注目したいのは、『犯境録』です。これは『夷匪犯境録』または『夷匪犯境聞録』といわれるもので、アヘン戦争に関する漢文の公文書や見聞情報を集成したものです。この『犯境録』には、中国の官僚らしか入手できない資料が含まれています。アヘン戦争から5年しかたっていないこの時期に、一介の土浦藩士である尉信の元まで、『犯境録』がもたらされていたことがこの書状からわかるのです。

（市史編さん係 江島万利子）



長島来翰集（18巻） 五十嵐愛山書状（当館所蔵）

土浦藩土屋家の横顔

このコーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。

基本的には「土浦土屋家系譜」(『茨城県史料 近世政治編Ⅲ』所収)を用いました。ゴシック体部分が引用です。



その十、土屋 寅直【つちや ともなお】

幼名 多仁丸 采女 采女正

土屋彦直嫡男 母は土屋左門寛直養女

文政三年二月二十四日 小川町邸に生まれる。

明治二十八年十一月二十九日卒。太亀院殿暢軒寅直大居士と号す。谷中天王寺共同墓地に葬る。

室は有馬玄蕃頭頼徳女。継室は同頼徳三女。

■ **父の隠居** 同(天保9)年十二月七日依 召登 営父相模守病氣二付願之通隠居被 仰付、家督無相違九万五千石被下置可為雁之間詰旨被 仰出(後略)

寅直の父土屋相模守彦直は文化8(1811)年に水戸徳川家から土浦藩土屋家に養子入りしました。天保9(1838)年、彦直は病気を理由に隠居することを幕府に願い出ます。この出願が認められ、当時数えて19歳の寅直が家督を継ぎました。隠居した彦直は弘化4(1847)年7月30日に亡くなり、土屋家の菩提寺であった浅草の海禅寺に葬られました。

■ **大坂城代就任** 同(嘉永3)年九月朔日依 召登 営於 御座之間大坂御城代被 仰付被叙四品 嘉永3(1850)年9月1日、寅直は大坂城代に任じられると、従五位下から従四位下に昇格しました。大坂城代は幕府の重要ポストであり、無事に務め上げると京都所司代、さらには老中へ昇進できる可能性があります。

大坂へ赴くに際して寅直は、2代当主土屋政直が徳川綱吉から拝領した鞍に、虎皮の鞍覆いを掛けて登坂したいと伺いを出し、幕府はこれを認めています。土屋家にとっては政直以来となる大坂城代への就任でした。しかし、嘉永7(安政元・1854)年9月には大坂湾にロシア船が来航したため、寅直はその対応に追われます。この頃から寅直は、積(胸や腹部の痛み)の持病を訴え、これを理由に幕府へ辞意を伝えています。安政5(1858)年10月26日、幕府は大坂城代の辞任を認めました。この辞任により、寅直は昇進の可能性が無くなりました。

■ **徳川斉昭の従兄弟として** 安政五戊午七月六日水戸前中納言斉昭卿慎之 嚴命、寅直以従弟之故 差控伺書(中略)差出処、即夕不及差控旨被 仰出

寅直の父彦直は水戸徳川家から養子に入りました。彦直の兄徳川治紀は、水戸徳川家7代当主であり、斉昭の父です。そのため寅直と斉昭は従兄弟同士です。斉昭は天保14(弘化元・1844)年5月6日、安政5年7月5日に幕府から謹慎の命を受けています。寅直は、その都度幕府に対して、「自身は斉昭の従弟であるため差し控え(謹慎)をした方がよいか」という差し控え伺いを立てています。これに対して幕府は、いずれも謹慎する必要はないと回答しています。斉昭の親族として難しい立場にあったことも、寅直の持病が悪化する要因だったのかもしれませんが。(西口正隆)

このコーナーでは、博物館活動にかかわる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、2021年の夏休みに当館を見学した茨城県立土浦第一高等学校2年生の皆さんのレポートの一部を掲載しました。

土浦一高生の博物館見学感想レポート

- ★土浦市立博物館に行ったのは小学生以来で、あの時よりも日本史を学んでいる今の方がとても興味を持って見ることができたと思う。古くからあった土浦の町の様子に思いをはせながら、美しい展示品や発掘物などを見られてとてもよい経験になった。あまり時間がなくゆっくり見られなかった部分もあるので、また行ってじっくり見たい。
- ★私が最も心引かれたのは堆朱硯箱である。図柄が本当にすてきで、時代が感じられてものすごく好きだった。撮影禁止だったのが非常に残念である。また、遊雀図も雀の質感が出ていてすごく好きだった。すてきなものがたくさんあり、非常に楽しく勉強になった。
- ★何度行っても必ず新しい知識を得ることができる博物館がすぐ行ける場所にあって恵まれているなど改めて思った。様々な展示の中で最も印象に残ったのは「戦争の記憶を語る」で、あたりまえなのかもしれないが思っていたよりも土浦市も深く戦争と関わっていたことを知る機会があつて良かった。もっと調べたり、できるだけ早く直接話を聞いてみたいと思った。貴重なパンフレットを買えてよかった。
- ★歴史というどうしても日本全体を意識してしまいがちだが、地元の歴史的背景を感じることができて興味深かった。これからはもう少し身近なところにもフォーカスを当てながら勉強していきたい。
- ★土浦のことをよく知れて、ますます地元が好きになった。本を読んだりするだけだと他人事のようにピンとこないが、実際に身近な場所の歴史を見ると感動があつた。
- ★土浦にこんなに資料の残った立派な博物館があるとは知らなかったのだが、以前祖父が訪れて感動したと言っていた話を思い出した。あのときはよくわからなかったが、今思うととても貴重な体験ができる充実した場所だと感じた。江戸時代の勉強後、また訪れたいと思った。

コラム (56) 高校生が来てくれました

「^{けんじゅう}度十もよろこんで、杉のこっちにかくれながら、口を大きくあいて、はあはあわらいました」(宮沢賢治『^{けんじゅうこうえんりん}度十公園林』)。度十は縄の帯をしめ、わらって森の中や畑をゆっくり歩いている青年です。両親のことをよく聞いて働いていました。生涯に一度、親に願いごとをしました、杉苗を700本買ってくれと。苗は育て杉林となり、子どもたちが遊ぶようになりました。度十はその姿を杉の陰から眺め、嬉しくてこっそり笑うのでした。

2021年の夏休み、高校生が博物館に三々五々、やってきてくれました(上段「霞短信」をご覧ください)。マスクの下でほほえむ自分に、度十の姿を重ねました。

賢治の物語では、度十はチフスにかかって亡くなります。しかし、杉林はりっぱな緑に育ち、「さわやかなにおい、夏のすずしいかげ、月光色の芝生が、これから何千人の人たちに、ほんとうのさいわいが何だかを教えるかかぞえられませんでした」と続いています。子どもたちが杉林に遊びにきたように、これからも高校生が博物館にきてくれますように。

(木塚久仁子)

情報ライブラリー更新状況

【2022・1・5現在の登録数】

古写真 601点(+1)

絵葉書 513点(+1)

※()内は2021年9月29日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

※新型コロナウイルス感染予防のため、一部ご利用を制限しております。ご了承ください。

霞(かすみ) 2021年度

冬季展示室だより(通巻第56号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir000378.html>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2021年度冬季展示は、2022年1月5日(水)~3月13日(日)となります。「霞」2022年度春季展示室だより(通巻第57号)は2022年5月上旬発行予定です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。(カラー版)